

平成21年6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520255
 研究課題名（和文） 越境する「ケルト」の想像力と文化的アイデンティティの生成・変容
 研究課題名（英文） The idea of “The Celts” and the cultural identity in process of formation and transformation in the transatlantic area
 研究代表者
 松井 優子（MATSUI YUKO）
 駿河台大学・現代文化学部・教授
 研究者番号：70265445

研究成果の概要：概念としての「ケルト」は、ロマン主義時代のスコットランドの作家たちによって、近代ブリテンの象徴的な秩序や文化的アイデンティティに不可欠な要素として組み込まれることになったが、その後、その概念性を増したり意味合いを変容させながら、アメリカ合衆国の南北戦争をめぐる論議やアイルランドの「ケルト」復興における言説にも参考となるロジックや理論的基盤を提供していたことを個々の具体例を通して検証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、西洋史、比較文学、ケルト

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始を促した背景には、「ケルト」言説をめぐる再検討の動きと、大西洋を横断してひとつの文化圏としてとらえようとする動きという、近年の二つの大きな研究動向の流れがある。

「ケルト」言説をめぐる再検討の問題としては、本質的・民族的な実体としての「ケルト」ではなく、概念的な構築物として「ケルト」民族をとらえようとする議論が挙げられる。18世紀初頭の「島嶼ケルト」の言語学的発見に端を発し、19世紀のエルネスト・ルナンやマシュー・アーノルドによって確立され、スコットランドやアイルランドの国民

意識の形成に重要な役割を果たしてきた「ケルト」言説に対する再検討が進んでいる。

一方、英文学においては、大西洋間の概念的・文化的往来をめぐる問題意識の深化もみられる。この問題意識は、帝国主義や植民地主義についての研究成果の蓄積やグローバル化の進行にともない、従来の文学研究に新たな枠組みを提供するものとして注目されている。

2. 研究の目的

本研究は、以上の二つの視点を理論的基盤としつつ、「ケルト」をめぐる想像力の移動という視座を念頭に、文化的アイデンティティ

イの生成・変容の問題を再考しようとするものである。本研究の研究代表者および分担者は、これまでスコットランド、アメリカ合衆国南部、アイルランドの各文学における国民意識や文化的アイデンティティをめぐる研究を進めてきたが、本研究では、その研究成果を交錯させる新たな視点のもとで、「ケルト」概念がナショナルな想像力や文化的アイデンティティとどのように接続し、関連地域を移動していったかを複眼的に検討すること、およびそれを通して新たな文学研究の枠組に寄与することをめざしている。

3. 研究の方法

研究代表者と研究分担者とが、スコットランドを中心とするブリテン、アメリカ合衆国、アイルランドと対象地域を分担し、研究を進めた。

ロマン主義時代のスコットランドにおける状況については、ハイランド文化をめぐるウォルター・スコットや彼と同時代の小説を中心に、スコットランド国立図書館、国立文書館等で資料を収集するほか、国際スコット会議にて関連のセッションに参加し、「ケルト」言説成立の過程について分析した。アメリカ合衆国については、特に南部文学を中心としてブリテンの言説の受容の過程について考察し、議会図書館にて関連の文献調査をおこなった。また、アイルランドをめぐる状況については、マシュー・アーノルドの「ケルト」論の再検討をふまえて、W.B. イェイツの応答を中心に考察を進め、あわせて関連の学会に出席した。

以上の作業をふまえて、年に三回、相互の調査結果について検討する研究会をもった。

4. 研究成果

(1) ウォルター・スコットらの小説を題材とした、ロマン主義時代におけるスコットランドにおける「ケルト」言説の再検討については、2007年の英国オックスフォード・ブルックス大学における国際スコット会議への出席のほか、2007、2008年の2回にわたってエディンバラの国立図書館、国立文書館において資料調査を実施し、関連資料や作品の分析をおこなった。

まず、スコットによる小説第一作『ウェイヴァリー』(*Waverley*, 1814) においては、近代ブリテンの成立の過程が、主人公のエドワード・ウェイヴァリーの主体化の過程を通して演じられていることについて検証した。政府軍のイングランド人将校ウェイヴァリーは、好奇心と夢見がちな性格ゆえにジャコバイト軍に加わり、ハイランド地方での生活を経験するとともにハイランドの衣装を身につけ、戦闘に臨む。が、ジャコバイトの敗走とともに、ウェイヴァリーは熱意のままに生

きてきたそれまでの自らの生活を「ロマンス」と呼び、これを抑制することによって「現実の歴史」が開始したのだと述懐して、現秩序への参入を自覚する。

「熱意」(これはあるいは欲望と呼ぶこともできる)の抑制を受けて初めてウェイヴァリーによって「ロマンス」として認識されたジャコバイト主義は、広く近代ブリテン成立の文脈においても、逆説的ながら、それによって「現実の歴史」の一部となって、そこに潜在することになる。現実には、ハイランドのクランがすべてジャコバイト軍に加わったわけではなく、また、ジャコバイト主義はハイランドのクラン以外の勢力をもふくんでいたはずだが、このように前景化されることによって、ハイランド地方の「ロマンス」化が生じると同時に、中心的な力に対する対抗的な価値観を代表するハイランド文化という対比も招きいれている。

こうして、ハイランド文化は、主人公ウェイヴァリーの主体化の過程を通して現秩序の成立に立会い、その一部としてそこに潜在する「ロマンス」ないし無意識として、また、中央文化に対する対抗的な価値観として、ブリテンおよびスコットランドの文化的アイデンティティにおける重要な役割を演じることになった。これはブリテンやスコットランドのみならず、近代におけるネーション成立を扱った作品のモデルとしても有効であるはずである。

(2) ジェイムズ・マクファーソンによる『オシアン詩』やスコット以後に書かれたスコットランドの他の作家、とくに女性作家たちの作品の分析においては、この対抗的な価値観としてのハイランド地方の変奏が見られた。たとえば、メアリ・ブラントンやスーザン・フェリアらの小説では、ハイランド地方や文化は、「故郷」や家庭的価値観の担い手として扱われている。

なかでも、クリスチャン・イソベル・ジョンストンの小説『クラン・アルビン』(*Clan Albin*, 1814) においては、これらの要素がともに扱われ、スコット作品への応答ともいえるような特徴を示している。ここでは、ハイランド人の生活は、軍隊やいわゆる「ハイランド・クリアランス」の描写を通して、「写實的」に扱われる。その一方で、ジョンストンはこうしたハイランド地方の写實的な描写を現秩序への批判から、対抗的価値観の提示へと展開する。ここでのハイランド地方の生活は、主要な登場人物たちによって選択されるべきものであり、ここに住むのは、いわゆるハイランド人だけではない。この住人は、いわば、概念としての「ケルト性」を身にまとった、さまざまな民族や国の出身者である。その一方、「クリアランス」によって

アメリカの地に移民したハイランド出身者は、それをアメリカに接木しようとするのである。

そして、現実世界においてこうした価値観を演じた重要な「作家」の一人が、ハイランド地方の別荘を「ハイランドのわが家」と呼んだ、当時の君主、ヴィクトリア女王である。女王がハイランド地方滞在中に記した『日誌』からの抜粋は当時のベストセラーとなったが、この『日誌』はハイランド言説の一部として、女王自身による、「私的」な生活を扱い、「民族の母」としての家庭的な女王像を効果的に提示することで、当時の国家や帝国の統合にも寄与したと考えられる。

(3) さらに、スコットによる作品群には、「ケルト」言説と大西洋文化圏という点で、以下のような特徴がみられた。基本的に、スコットの小説には、黒人や「インディアン」、西インド人が直接姿を現すことはなく、かわりに、西インド人らはハイランド人との比較のうえで、比喩として呼び出されている。彼らはブリテンによる支配をめぐる種々のポリティクスとの関係で、ブリテン内の集団、それも、いわゆる中心にたいする「周縁」に属する集団と重ねあわされるかたちで登場し、中心に対する潜在的な力としてそこに住まうことになる。スコットによるこの類比は、特定の集団を直接関係づけることで、各ネイションにおける相互の位置を参照させ、それぞれのネイション内部での、各集団のアイデンティティ形成に関与する可能性を帯びる。これは、「ケルト」の概念化の一過程であると同時に、それが人種や居住地を越えて複数の集団を結びつけた一例でもある。

(4) こうした可能性がじっさいに形を取っている例として、スコットランドの「国民詩人」ロバート・バーンズの現代における受容が挙げられる。バーンズは、近年の詩や小説、スコットランドの行政を担当するスコティッシュ・エグゼクティブ発行による小冊子等では、アメリカの黒人政治家と並べて描かれたり、かつての西インド諸島の黒人奴隷への共感者として提示されたりすることも多く、大西洋をつなぐ視点をもった、新たな「国民詩人」像の提示がみられる。バーンズはロウランド地方出身で、「ケルト」文化とは直接的な関係はもたないが、優勢な英語文化に対するスコッツ語の民衆の詩人としての従来のイメージとともに、『ウェイヴァリー』以下にみられる、中央勢力に対する対抗的価値観としてのハイランド地方、スコットランドにおけるハイランド地方の前景化、そのうえで、スコットによって直接重ねあわされた各民族・集団という上述の構図は、「国民詩人」像の現代版を通じて、スコットランドが現代

におけるアイデンティティを模索するこうした例において、これを側面から支える構造にもなっていると思われる。

(5) 一方、スコットの小説『セント・ロウナンズ鉱泉』(*Saint Ronan's Well*, 1824)とその受容は、こうした「ケルト」言説が実在の特定の共同体のアイデンティティ形成に影響を及ぼした興味深い具体例として挙げられる。つまり、ここでは、スコットが作中で提示した架空のケルトの聖人「聖ロウナン」が、その虚構性にもかかわらず、実在性を獲得していったのである。作中の舞台「セント・ロウナンズ」のモデルとされたスコットランドのボーダーズ地方にある実在の町イナリーセンは、19世紀を通じていわば「町おこし」の手段として、この「セント・ロウナンズ」を名乗り、村の鉱泉をこう改名して整備し、小学校やスポーツチーム、楽隊の名にこの名を冠して、セント・ロウナンズの村としてのアイデンティティをまとっていく。それとともに、聖人「聖ロウナン」もリアリティを獲得し、作品の出版から200年近くを経た現在では、地元イナリーセンでも実在の歴史的人物だと(誤って)信じられるようになって、毎年、「セント・ロウナンズ・ゲームズ」が開催され、ハイランドの衣装をまとった人物が登場するとともに、作中での「聖ロウナン」のエピソードをめぐる劇の上演や彼を先頭とした行進もおこなわれている。

スコットランドのハイランド地方でなくロウランド地方において、それも、スコットが創造した架空の「ケルト」の聖人がこのように現実味を帯びて受け取られ、さらには、それが村の守護聖人としての地位を獲得していく背景には、概念としての「ケルト」が喚起する想像力の問題も大きかったと思われる。歴史的には、スコットランドはもともとアイルランドからケルト的キリスト教が伝わり、広まっていた土地であり、これと結びついた「聖ロウナン」は、長い歴史的スパンを示唆させる存在であると同時に、悪魔が登場する作中のエピソードは異教性をも感じさせる。カルヴィニズム的傾向の強いスコットランドのロウランド地方において、こうした異教性が悪魔と結びついた独自の意味合いをもっているが、これに、マクファーソンが押し出し、マシュー・アーノルドによって踏襲される「ケルト」的な超自然、幻想的な性格と結び付けられることで、現実感をもし出す効果を挙げている。

あわせて、マクファーソンの「古代ケルト人」が示した起源としての「ケルト」の可能性や、スコットによるスコットランドを「代表」するハイランド文化の提示も、イナリーセンが架空のケルトの聖人を守護聖人にい

ただ背景として重要であったと考えられる。これは、スコットランドのボーダーズ地方の小さな町の一例にすぎないが、「ケルト」的属性が一般に共同体の想像力に対してもつ吸引力を雄弁に示している。

以上がロマン主義時代以降のスコットランドにおける「ケルト」言説の成立、および変容の過程であるが、スコットの歴史小説における起源や故郷としての「ケルト」や、こうした概念としての「ケルト」言説に対する現実のハイランド人からの応答のありようについては、今後さらなる検討が必要である。

(6) これらスコットの小説は、アメリカ合衆国でも、ジェイムズ・フェニモア・クーパーやウィリアム・ギルモア・シムズらの作品に影響を与え、特にクーパーは、スコットが直接ハイランド人になぞらえていた「インディアン」、つまり、アメリカ先住民の生活を取り上げることで、建国初期のアメリカ合衆国を描いた。が、こうした著名な例だけでなく、同様の例はアメリカ合衆国におけるほかの小説でも、観察することができる。

アメリカ合衆国における事情については、越智が2007年夏にワシントンDCにある議会図書館にて、奴隷制廃止反対運動のパンフレットなどの文献を収集し、その内容を確認する作業を翌年にかけて行うとともに、南北戦争における南部のロジックをめぐる研究書にあたった。このような資料の読み込みから、結果として、南北戦争に参加する際の南部の政治言説は、英国やアイルランドの政治言説の多大な影響下でかたち作られていったことが明瞭になったが、この部分の論証には奴隷制擁護の言説にとどまらず、南部を連邦離脱に向かわせる政治的議論のさらなる調査を必要とするという今後の課題も浮き彫りになった。

具体的な例として、オーガスタ・エヴァンズの小説『マカーリア』(Macaria, 1863)においては、南部のナショナリズム言説が、すでにスコットランドの啓蒙思想との連動が指摘されている独立戦争と直結するロジックと比喩で語られることをドゥルー・ファウストの南北戦争研究などを援用しつつ確認することができる。とはいえ、南北戦争時の南部の政治言説におけるエドモンド・バークをはじめとする思想家の影響については、その背景および詳細な論証に関してはむしろ今後の課題である。

(7) アイルランドと「ケルト」の概念との関係は、基本的に、アイルランドというネイションが置かれた政治状況と密接に連動しながら展開する。まず、マシュー・アーノルドは『ケルト文学の研究』において、ブリテン諸島におけるケルト諸語の使用とアイル

ランド人の政治的主張とに反対し、英語を話す一つの民族への融合を説くという政治的立場に立つものの、「ケルト」の精神がかって生み出した文学を「科学」的に研究する意義を主張し、彼が批判してやまない英国中産階級の俗物根性・実利主義を正すために、「ケルト」の鋭敏な感受性、自然の神秘への感応といったその精神性を賞揚した。三好はこの屈折した「ケルト」論を、翻訳・注解作業を伴いながら読み解き、「ケルト」をめぐる言説の歴史とその文化的・社会的・政治的機能という文脈で解釈して、成果の一部を論文や研究会報告として発表した。なおアーノルドの『ケルト文学の研究』は、英国での雑誌連載とほぼ同時にアメリカの雑誌に転載され、また彼は南部の連邦離脱に対する関心を書簡で述べたこともあったが、アメリカ社会において彼の「ケルト」論がもちえた意味および受容のされ方については、今後の課題とする。

(8) アーノルドの「ケルト」論に対して、アイルランド文芸復興期の詩人W. B. イェイツは、その本質主義的なところを弱めたうえで、アイルランド「国民文学」創出の一翼を担う「ケルト」復興においてこれを活用することになる。アーノルド的な「ケルト」概念は、アングロ・アイリッシュの彼が言語による疎外を感じることなくアイルランド「国民文学」創出における中心的役割を果たすことを容易にしたとも言える。若き日のイェイツは「ロンドンのケルト」と称して、ボストンのアイルランド系移民の定期刊行物に、アイルランド文学関係の最新情報を寄稿していたが、こうした情報がアイルランド移民のコミュニティでいかに受容されたかについてはさらなる調査が必要である。

あわせて、イェイツは、ルナンの「ケルト」論では大きな比重を占めながらも、アーノルドがさほど重きを置かなかった「ケルト」とキリスト教伝来以前の宗教との結びつきを前景化し、キリスト教と「ケルト」的な異教信仰との対立を詩的想像力の一つの源泉とした。時代思潮であった懐疑にも、プロテスタント信仰にも、復興期を迎えていた多数派のカトリック信仰にも、安住することが出来なかったイェイツにとって、「ケルト」のスピリチュアルな要素のもつ意味は大きかったと言える。

以上がアーノルドの「ケルト」論に対するイェイツの応答であるが、今後の課題として、文学によるアイルランドの国民意識の形成においてルナン＝アーノルド＝イェイツ的な「ケルト」概念が果たした役割についての俯瞰的な視点からの検討と評価が必要である。

(9) 以上、概念としての「ケルト」は、ロマン主義時代のスコットランドの作家たちによって、近代ブリテンの物語の象徴的な秩序や文化的アイデンティティに不可欠な要素として組み込まれると、その後、その概念性を増したり意味合いを変容させつつ、アメリカ合衆国の南北戦争をめぐる論議やアイルランドの「ケルト」復興における言説にも参考となるロジックや理論的基盤を提供していたことが、個々の具体例からうかがえる。こうして、概念的な構築物としての「ケルト」が、大西洋文化圏におけるナショナルな想像力や文化的アイデンティティの形成に関与してきたありようについて一定の検証が得られたが、一方で、「ケルト」をめぐる文化的アイデンティティの、言わば汎用可能なひとつの構図を同定する作業、なかでもアメリカ合衆国においてそれがどのように借用されたかについては、なお検討の余地が残されている。また、今後の考察の可能性として、上記各項で言及した検討課題に加え、この概念的な「ケルト」性と「実体」との関係について、ジェンダーや宗教の側面からの詳細な考察が必要であると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① MATSUI Yuko, 'Promoting Saint Ronan's Well: Scott's Fiction and Scottish Community in Transition', 『駿河台大学論叢』、第35巻、1-21頁、2008、査読無。
- ② 三好みゆき, 「マッシュュー・アーノルドの『ケルト文学の研究』再読(1)」, 中央大学英米文学会『英語英米文学』、第48巻、23-41頁、2008、査読無。
- ③ 越智博美, 「南部の女を想像すること——オーガスタ・エヴァンズ『マカーリア』と女の規範」, 『人文・自然』(一橋大学)、第3巻、149-173頁、2009、査読無。

[学会発表] (計1件)

- ① 松井優子, 「サンディトンとセント・ロウナズ鉱泉」, 日本オースティン協会、2007年6月30日、明治学院大学。

[図書] (計5件) (単著1件、共著4件)

- ① 松井優子, 勉誠出版、『スコット——人と文学』、2007、総297頁。
- ② 三好みゆき, 中央大学出版部、『カトリックと文化——出会い・受容・変容』所

収「イエイツの『動揺』——カトリシズムへの誘いと拒絶」、2008、総477頁(うち411-433頁)。

- ③ 松井優子, 明石書店、『スコットランドの歴史と文化』所収「『ハイランドのわが家』——19世紀ハイランド言説と『ホーム』の概念」、2008、総622頁(うち321-339頁)。
- ④ 松井優子, 晶文社、『ロバート・バーンズ——スコットランドの国民詩人』所収「バーンズ以後の文学——『ロバート・バーンズ』という不安」、2008、総601頁(うち457-474頁)。
- ⑤ 松井優子, 音羽書房鶴見書店、『イギリス小説の愉しみ』所収「ウォルター・スコットのコズモラマ——『ウェイヴァリー叢書』と語りの遠近法」、2009、総456頁(うち67-85頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 優子 (MATSUI YUKO)
駿河台大学・現代文化学部・教授
研究者番号: 70265445

(2) 研究分担者

越智 博美 (OCHI HIROMI)
一橋大学・商学研究科・教授
研究者番号: 90251727
三好 みゆき (MIYOSHI MIYUKI)
中央大学・法学部・教授
研究者番号: 60209963

(3) 連携研究者

(上記研究分担者は、2008年度は連携研究者として参加)